

Contribution

# 広島 爆心地へ最初に 救護に入ったのは歯科医師だった

中原 泉

日本歯科大学 理事長

「課業開始間もなく、〇八一五外科実習教室において受講中、突如、眼前を白きマグネシウムをたきし如き閃光の走りたる直後、ドカンという衝撃波が、教室のガラス窓を震わす。一瞬のことなり。」  
海軍歯科見習尉官の齋藤貞雄の証言である。広島県賀茂郡<sup>のみお</sup>乃美尾村の賀茂海軍衛生学校の教室。昭和20年（1945）8月6日午前8時15分であった。

## ■ 賀茂郡の賀茂海軍衛生学校

「（快晴）本日より実習開始、今週は外科実習である。実習室で手を洗っていた時、目に激しい閃光を感じ、次いで大音響と熱風の衝撃を肌と感じた。何事か？と戸外に飛び出した。直ちに空襲警報が鳴り渡り、周囲は騒然となった。目の前の山の上をB29が一機飛行しあり。幾重にも広がる白い雲が立ち登

戦後80年、被団協のノーベル平和賞受賞の年に、校友・齋藤俊夫先生（元『歯科ペンクラブ』代表・齋藤貞雄先生のご子息）より、埋もれていた広島原爆に関する資料の提供を受けた。欺界に広報し記録すべき史料と愚考し、まとめたのが本稿である。（著者）

っていた。何にか大爆発が起きた様であった。」

前文は、海軍歯科見習尉官の沢田秀雄の証言。

「午前八時、課業整列後、各分隊は附近の教室に入り講義を受けていた。突然一瞬マグネシウムの閃光のような光を感じ、しばらくして大音響とかなり強い空気震動を感じた。その時窓越しに広島市方向に、巨大なキノコ雲を明確に見た。キノコ雲は、白から赤—黄—青紫と変色していった。」

前文、海軍歯科見習尉官の平塚哲夫の証言。

「晴。本日より愈々臨床実習が始まった。一週間外科実習である。本日は手指消毒法を行う。〇八一五頃変な紫色の光がして、暫くして相当強烈な風圧を感じた。何かと思い戸外に飛び出すと、広島方面と思われし所に、変な入道雲の如きモクモクと動いている。何か新兵器ではなかろうか、と学生同士で噂した。ある者は火薬庫の爆発だと言う。変な雲は長時間西の空に漂っていた。不安の中に夕方になる。予想を違わず、やはり広島は全滅しているらしい。」

前文、海軍歯科見習尉官の渡辺信平の証言。



図1 学生時代の齋藤貞雄.

「爆風の吹き来たりしと思わるる西の広島方向を見上げるに、透き通るがごとき紺碧の美しき夏空に、キノコ状をなしたる真白き巨大なる雲の渦を巻き、モクモクと上へ上へと押し合ふがごとく昇り行くを見る。

学友の一人が、『これは広島<sup>の</sup>陸軍の爆薬庫でも爆発したるに非ずや』とつぶやく。それにしては、あまりにもキノコ雲の無気味にして、怪異なる形状に一同不安の心に駆らるる。」

「本校某教官は同時刻、グランドより教官室方向に向う途中閃光の震動をうけ、明確にキノコ雲の発生と成長を目撃す。キノコ雲は、白、赤、黄、青紫、そして白と変色したという。また閃光と同時に山稜に落下傘の降下するを望見し、降下アメリカ兵がおれば、ただちに捕虜とするよう学校本部に連絡せりといふ。」

「呆然と見上げる我らの上に、キノコ雲は生物のごとくますます大きくふくれ上がり、刻々と変化しつつ先端のカサ部分が、青空を押し上げるがごとく中空に達する。正に悪魔の化身なるべし、しかしその時期知らず。

あのキノコ雲の下に広島<sup>の</sup>軍官市民、老幼男女を問わず、十万人が一瞬のうちにその身体を爆烈し焼き尽され、生命を失っていたとは。またその後、数時間ののち我ら第十一分隊は、その阿鼻叫喚の地獄の地に救援を命ぜられるとは。」

前文は、冒頭の齋藤貞雄の証言の続きである。

齋藤貞雄は、大正12年5月19日に千葉に生まれ、昭和19年9月に日本歯科医学専門学校を繰りあげ卒業（第34回卒）した。口腔外科学教室に入局したが、召集により12月に、山梨県甲府連隊に陸軍二等兵として入隊した。翌昭和20年（1945）4月15日に海軍歯科見習尉官を拝命し、広島県の賀茂郡乃美尾村の海軍賀茂衛生学校に入校した（図1）。

同校は、戦局急迫する本土決戦に備えて、戸塚海軍衛生学校の分校として、昭和20年4月に新設された。校長は田辺優軍医中將、学生隊長は山形勝治軍医中佐、彼らの配属された第十一分隊の監事は森本正紀海軍軍医少佐。隊員は、昭和20年4月15、18日に入隊した、歯科見習尉官（歯科医師）第十一分隊の50名と、歯科医専在学中の学生隊四コ分隊215名の計265名、薬剤科見習尉官三コ分隊140名、および看護科下士官隊、看護兵練習生隊が所属していた。

歯科見習尉官は、昭和11年卒業から19年卒業まで、年令や経験はバラついていた。けれども彼らは、すでに呉市の空襲に救護隊として出動した体験をもっていた（図2）。

同校のある乃美尾村は、広島の南西部の山紫水明の農村地帯で、じかに爆撃の危険に曝されることもなく、呉市街の空襲や空中戦を遠望していた。瀬戸内海に面する呉市は、海軍工廠のある呉軍港をもつ要衝の地であったが、すでに連合軍に制空権を奪わ

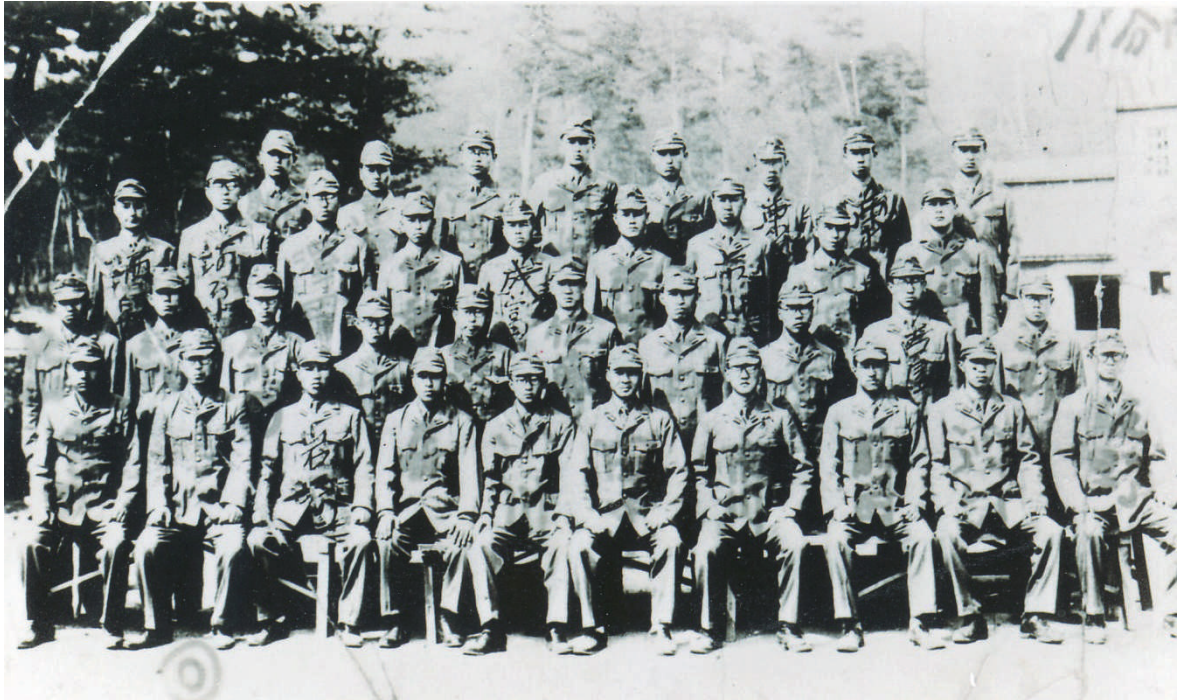


図2 昭和20年4月入隊の第十一分隊の隊員。

れていた。

### ■ 歯科見習尉官の救護隊

「正午過ぎ、呉鎮守府長官より学校長あて出動命令あり。救援隊長に第十一分隊監事の森本正紀軍医少佐、同補佐の第十二分隊監事の島筒康夫軍医大尉、我ら第十一分隊の隊員五十名の歯科見習尉官全員に出動命令が下る。第三種軍装に短剣を吊り準備を整え、一七三〇に救護隊を編成した。副官の訓示をうけ、トラック三台に分乗出発す。途中、呉海軍病院において約千人の治療品を積載す。」

前文、齋藤貞雄歯科見習尉官の証言。

「正午過ぎ呉鎮守府長官から、賀茂海軍衛生学校長にあて、学生隊に出動準備が下令された。学生隊は、第十一分隊監事の森本正紀軍医少佐を救護隊長に、補佐に第十二分隊監事の島筒康夫軍医大尉を任

じ、第十一分隊全員に出動命令が下令された。私も隊員の一員として出動したのである。」

前文、平塚哲夫歯科見習尉官の証言。

第十一分隊の歯科見習尉官50名は、逸早く救護隊を編成した。この時点では、米軍が広島にウラニウム爆弾を落下したとして、急拠、放射能による重症火傷の治療準備を急いだ。火傷手当に必要なリパノール肝油1斗缶、ガーゼ、三角巾、その他のある限りの医薬品類をトラックに積みこんだ。

17時30分、隊員は学校庁舎前の校庭に集合し、副官から短かい訓示をうけたあと、ただちにトラック3台に分乗して出発した。

呉市広町をって18時30分頃に、呉軍港に近い呉海軍病院に立ち寄った。救護隊は、同病院の医薬品類1,000人分を、手際よく次々とトラックに満載した。

先月の7月13日に江田島市の兵学校が二度の空襲をうけ、さらに24日には、江田島港に停泊中の航空巡洋艦「利根」、防空巡洋艦「大淀」が、艦載機の攻撃をうけて沈没した。その折、第十一分隊の隊員は呉海軍病院に寝泊りして、救急救助の医療活動に当たっていた。彼らは、すでに戦時の現場体験があったので、今回も率先して迅速に動いた。

「呉海軍病院副官より隊長らに、『従来の戦場で、まったく経験しない新型爆弾（副官はドイツ語にて、エトワス・ノイエスと言ふ）の攻撃をうけ、広島市に甚大な被害を生じたり。現場陸軍衛生部隊も殆んど全滅し、また再度攻撃を受ける恐れあり。充分注意して活動するよう』との訓示をうけたり。

しかるに、我らもとより新型爆弾の何たるかも知らず。前途の広島のいかなる惨状かも知らず。むしろ平常教育日課の厳しさより脱けられたと、上陸気分<sup>い</sup>に心中騒ぐのをいかんともし難し。」（齋藤貞雄証言）

実に、同日8時15分、重さ4トンの濃縮ウラニウム爆弾、コードネーム「リトルボーイ」は、広島市中心街の上空、高度約600mで炸裂した。その直撃を浴びた人は3000R/時で即死した。周辺部で600Rを受けた人は後に全員死亡、400Rは半数、200Rは三分の一が死亡したという。

19時頃、50人の救護隊と医薬品を乗せた3台の重量トラックは、呉海軍病院からまっしぐらに国道二号線を南方の広島市へ向かった。呉市から広島市までは23.4kmだが、平時の道路通行とは違い、到着までに3時間余かかったという。「トラックの荷台に輪となり座り、呉の市街を揺られながら、瀬戸内海の海岸寄りの道路を広島に向かふ。すでに周囲は暗黒の闇なり。」（齋藤証言）

「我々第十一分隊は、救助に出動する事になった。一七三〇頃三台のトラックに分乗し、呉経由で広島に向かった。呉を過ぎると西の空は真っ赤になっている。被難民が呉方面に向かって歩いている。或いは路上で死んだ様に眠っているのを見て、戦<sup>いくさ</sup>の現状をしみじみと感じ、悲壮感に体が固くなるのを覚える。」（渡辺信平）

「さらにすすむに、広島の上空赤く燃えて空を焦し、その明り瀬戸内海に映える。大小の島に黒く点在する間に、また数隻の艦船あるいは沈没してマスト煙突のみを海上に残せしもの、あるいは島々の影にかくれて逃げるがごとく浮かぶ艦影を見る。かつての艦<sup>もうどう</sup>（軍艦）いずこにありや。幽寂たる光景に思はず身の震いを感じ。次第に不気味に薄暮のごとく明るさを増す。呉街道の緊張を増した我らを乗せ、トラックは広島に近づく。」（齋藤貞雄）

## ■ 広島爆心地の被災者たち

「広島市が見えてきた。峠の坂を下りかけると、坂の中央から下の方全体が、火事で焼けたあとの様に家は殆どなくなり、所々に煙りが出ている。街の中央の方を見ると、コンクリートのビルは一部分が破損し、くづれていて窓から煙が出ていたり、赤い火が出ていて燃えている所もある。広島市内を流れている太田川の方にある産業会館の屋根上が、鉄骨をだしてムクムクと煙を出している。」（軍医の勝田清和）

前文の産業会館は、のちの「原爆ドーム」である。

「市街地に入ると道路上に焼けた木の下に、人間がバタバタと倒れているのを見つけた。車を降りて調べて見ると死体・死体ばかり。なかには軀に反応はあるが、全く意識不明の臨終（死の直前）の状態

ばかり。殆どの人が身の露出部には、2～3度の火傷が確認された。道路上の死体を横の方に移し、車を進行させる。街の中央に近づく程、その状態が多くなって行く。」(勝田清和)

「二葉山よりの一隅にかなり大きいバラックがあり、この中に約五百人ぐらいの負傷者が横たわっていた。救護隊員の半数はここで直に三人一組となって、ローソクの明かりをたよりに治療を開始した。残余の半数の隊員は、そこからやや中央寄りにテント張りの応急治療所を設営し治療を開始し、七日早朝には前記のバラック内の隊員もこれに合流し治療を続けた。

負傷者のほとんどは第二度および第四度の熱傷、骨折、全身爆傷患者であり、熱傷部はリバノール肝油の塗布、包帯、リバノール湿布包帯をほどこし、骨折部は副木固定、重傷者には強心剤注射、さらに苦悶する患者には、モルヒネ注射をおこなうという簡単な処置であった。しかし想像に絶した多数の負傷者で、治療薬品、包帯材料などは七日の朝にはほとんど無くなった。

明るくなった練兵場のあちこちの負傷者に、バケツで汲み集めた水を水筒に移して飲ませ激励して歩くことが、作業の大きな役目にかかわって行った。助けを呼ぶ負傷者、われ先にと足にすがりつく、すがりついた際にふれた手の皮がズルリと剥げ、いたましい傷面をさらけ出す。この多数の負傷者に五十名の隊員では、それらの中のごく一部の人だけしか治療はできず、草原の中で見殺しのような状態であった。」(平塚哲夫証言)

「東練兵場で一晩一睡もせずに救急に当たる。熱傷が大部分である。ローソクの火を頼りに治療に当たる。『兵隊さん治療してくれ』とせがむ患者、『水

をくれ』と叫ぶ患者。呉方面の患者と比較して、大分こちらの方が興奮している。あちこちに受傷者や死者がごろがり、足の踏み場も無い程だ。広島全市の人口の三分の二は、受傷者または死者であるという。被害の大きいのに驚く。持参した治療薬品は少なく患者は多く、応急処置しか出来なかった。」(渡辺信平)

「周囲一面は累々としてのたうち回り、または救いを求めさまよい歩く無数の被爆者の群れである。被爆者の皮膚は一目見たところはどす黒いのだが、火傷の手当にリバノールガーゼを貼布しようとして手を触れると、ぺろんと焼けただれた上皮がむけて、その下に点々と出血斑のある焦げて薄黒味がかって、桃色にふくれ上がった皮下脂肪組織が現われる。」(齋藤貞雄)

「『助けてください、軍医さん』。地の底からうめく様な細い声と共に、草むらの中から手が伸びて腕をつかまれた。その手掌が原爆の熱線で皮膚がただれ、水泡状になってヌルリと上皮が剥けて、こちらの腕にまつわり付いた。患者は滑って又どぶの中に落ちて行き息絶えた。燃え盛る地獄の業火を背に、あっちこっちで一人又一人と死んでいく。」(齋藤貞雄)

「あの暑い気温の空気の中で、原爆の熱線の為に焼けただれ、水疱火ぶくれに被われてしまった被災者達は、どんなに辛かったらうか。苦痛から少しでも逃れ様と汚い泥の水溜まり、どぶの中に身体を倒してのたうち回っても、そのどろ水も温くなっていては、熱感を冷やすどころか、水ぶくれが裂け破れて血がにじみ、焦熱地獄を増幅するばかりである。

医療救護隊と言っても助ける術も無い。カンフルを少しばかり注射しても、何の役にも立たない。起



図3 8月9日、広島市横川での隊員の救護活動.

き上がって少し歩いてはバタバタと倒れ、助けを求めてうめきながら絶命して行く。あの夜、無気味な暗黒の広島東練兵場の草むらの中で、我々を取り巻いて助けを求めて、うごめいていた何百、何千の被災者の内、何人の人が助かったのか、恐らくは殆どの人達が今はもう生存していないだろう。我々海軍歯科医達のあの時の、不眠不休の努力は所詮無駄だったのだろうか。

最後には医薬品も無くなり、ただ焼けぶくれた患者の目を、真水で洗ってやるだけになった。それで少しでも目を開けて、周囲が見える様になった被傷者が、『軍医殿、目が見えました。ありがとうございます』と、嬉しそうに感謝された細い声を今でも忘れられない。」(齋藤貞雄)(図3)。

すでに、在広島陸軍部隊、とくに陸軍衛生部隊は

全滅し、呉は7月の空襲で破壊されて余力なく、岩国は情報が遅れて広島への到着が遅れた。ここに賀茂衛生学校の、そのなかの十一分隊が先発出動し、自らの危険をかえりみず爆心地に突入し、<sup>るつぽ</sup>垣塙と化した放射能を浴びながら、救護活動に果敢に奮闘した。「人類が初めて経験した原子爆弾爆発直後に於ける、この任官前の見習尉官の決定的な活動こそ、海軍歯科医科五年の歴史の中で、歯科医官の活動の最後を飾るものであった。」(歯科見習尉官の早速晴雄の証言)

終に、齋藤貞雄は、次のように証言した。

「一瞬にして全市が壊滅状態になった広島爆心地に、いち早く乗り込んで、世界で初めての原爆被害者に医療救護活動を組織的に行ったのが、実は歯科医師であった事は余り知られていない。」

## 追記

齋藤貞雄は終戦後、千葉県船橋市で開業し、千葉県歯科医師会長等をつとめ、月刊誌『歯科ペンクラブ』を主宰した。救護隊員たちもまた放射能の真只中で被爆したが、戦後、長らく被爆者という差別をうけ、齋藤は晩年になって原爆手帳をうけた。彼は、日本歯科医史学会の月例会で、しばしば日本海軍を談じたが、広島原爆を語ることはなかった。令和4年11月16日逝去、享年100。

(戦後80年、関係資料を提供いただいた齋藤俊夫先生(千葉県)に深謝いたします。)

## 文 献

- 沢田秀雄：賀茂海軍衛生学校在学日記より，私家版。  
渡辺信平：賀茂海軍衛生学校入校日誌，私家版。  
勝田清和：広島原爆の想い出，私家版。  
仁科記念財団：原子爆弾広島・長崎の写真と記録，光風社書店，1973。  
齋藤貞雄：コラム天地人，日歯広報，1978。  
齋藤貞雄：コラム天地人，日歯広報，1979。  
加古武男：歯科医政史 海軍歯科医将校名簿，艦を知らない世代（加茂桜士会），歯科ペンクラブ，1981。  
齋藤貞雄：「助けて下さい，軍医さん」，「歯科医療 曲がり角の視点」，日本歯科新聞社，1984。  
齋藤 篤：葉桜，私家版，1988。  
齋藤貞雄：「救護隊第11分隊広島へ」，海軍軍医学校追想録，桜医会，1989。  
早速晴雄：海軍と歯科医官，桜医会，1989。  
平塚哲夫：「広島は泣いている」，海軍軍医学校追想録，桜医会，1989。  
海軍歯科医科士官の名簿，私家版，1991。  
久保親弘：海軍歯科医科士官制度についての考察，歯科ペンクラブ，1998。